

東日本大震災復興関連 埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

一下野郷館跡第3地点ほか一

2013年3月

岩沼市教育委員会

東日本大震災復興関連 埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

—下野郷館跡第3地点ほか—

例　　言

1. 本書は、宮城県岩沼市教育委員会が実施した東日本大震災復興関連事業に伴う市内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、東日本大震災で被災した個人住宅建築工事に伴う下野郷館跡第3地点、鶴ヶ崎城跡第9地点、防災集団移転事業に伴う新筒下遺跡隣接地の各発掘調査報告を合本にした報告書である。
3. 本書の編集・執筆は、岩沼市教育委員会生涯学習課内の協議の上、川又隆央、熊谷篤が担当した。
4. 出土品整理及び報告書作成については、2012年11月1日から2013年2月28日まで、岩沼市文化財整理室にて行なった。
5. 本書の遺構番号は、遺構の種別に関わらず、現地調査時に付したものを使用した。遺構記号は以下の通りである。

SE：井戸跡 SD：溝跡 SK：土坑 P：小柱穴

6. 本書に掲載した写真は、遺構・遺物とも川又、熊谷、伊藤和雄が撮影した。
7. 本報告書における遺構・遺物挿図等の指示は次の通りである。
 - (1) 遺構実測図の水糸高は海拔を示す。
 - (2) 縮尺は図に示すとおりである。
 - (3) 遺物観察表の法量における単位は「cm」である。
 - (4) 土層及び土器の色調は「新版標準土色帖」(小川・竹原：1973)に拠った。
8. 発掘調査及び資料整理に際し、地権者・各関係機関より御理解と御協力を賜った。感謝申し上げます。
9. 今回の発掘調査では、測量原点として平面直角座標である岩沼市公共基準点を用いているが、東日本大震災後の使用であるために将来的には若干の齟齬が生じる可能性があることを付記する。

目　　次

第Ⅰ章	東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査の概要（平成23・24年度分）	1
第Ⅱ章	遺跡の概要	2
第Ⅲ章	下野郷館跡第3地点	5
第Ⅳ章	新筒下遺跡隣接地	19
第Ⅴ章	鶴ヶ崎城跡第9地点	26

第Ⅰ章 東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査の概要 (平成23・24年度分)

1. 調査体制

平成23年度

調査主体 岩沼市教育委員会

調査担当 生涯学習課	課長 木皿光夫	主幹兼係長 石垣 茂
	技術主査 川又隆央	主査 猪野高広
	主事 沖田理恵	嘱託 熊谷 篤
	臨時職員 伊藤和雄	

平成24年度

調査主体 岩沼市教育委員会

調査担当 生涯学習課	課長 木野潤一	課長補佐 石垣 茂
	主幹 太田 充 (平成24年4月1日～9月30日)	条 和広 (愛知県豊明市派遣職員)
	技術主査 川又隆央	主事 沖田理恵
	嘱託 熊谷 篤	臨時職員 伊藤和雄

2. 調査実績

東日本大震災からの復興関連事業（罹災住宅の建設等を含む）に起因する調査は、下表の通りである。本書では、太文字で示した遺跡についての調査成果を収録している。なお、これ以外の遺跡で別途報告が必要なものについては、次年度以降の報告とする。

事業取扱年度	遺跡名	所在地	調査原因	調査方法	調査日	備考
23	下野郷振跡	下野郷字御内8	個人住宅	確認調査	H23.10.19～27	別途報告済み(岩沼市文化財調査報告書第12集)
	長谷古墳跡	南長谷字京669	農業倉庫解体	工事立会	H23.11.29	
	長徳寺前遺跡	長岡字塙壁8	寺院本堂建築	工事立会	H24.4.3	
	下野郷振跡	下野郷字御内18	個人住宅	確認調査	H24.4.27～5.10	本書収録
	下野郷振跡	下野郷字御内475	個人住宅	工事立会	H24.9.19	
24	新築下遺跡	押字分字新築下地内	防災集団移転事業	試掘調査	H24.5.21～5.18	本書収録
	高大崩遺跡・貞山堀	下野郷字汐入二地内	名取川地区直轄特定災害復旧 (柏の森排水機場)	確認調査・慎重工事	未実施	協議中
	貞山堀	下野郷字菅根地内ほか	名取川地区直轄特定災害復旧 (総合排水機場ほか)	確認調査	H25.3.4～既終中	
	萬ヶ崎城跡	栄町一丁目114-5ほか	個人住宅	確認調査・工事立会	H24.8.24, 9.4	本書収録
	下野郷振跡	下野郷字御内89-3	盛土及び雨水汎設置工事	工事立会	H24.12.14	
	貞山堀	下野郷字浜ほか	南貞山津河災害復旧	確認調査	未実施	協議中
	貞山堀	寺島ほか	五間原川災害復旧	確認調査	未実施	協議中
	下野郷振跡	下野郷字御内89-3	個人住宅	慎重工事	H25.1.23	
	貞山堀	寺島ほか	阿武隈川河口部災害復旧	慎重工事	未実施	協議中

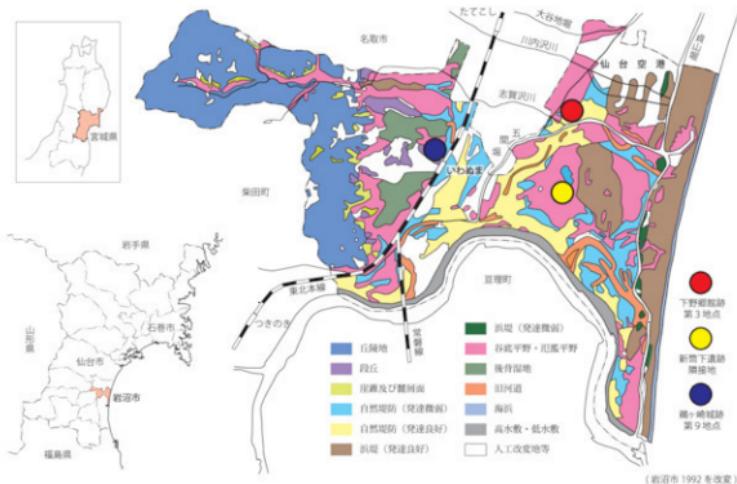
表1 復興関連調査取扱一覧

第II章 遺跡の概要

1. 位置と地理的環境（第1図）

岩沼市は宮城県の南東部に位置し、東は太平洋を臨み、北は名取市、南は阿武隈川を隔てて亘理町と、西は奥羽山脈から派生した陸前丘陵に含まれる高館丘陵で村田町・柴田町と市域を接する。市域の南端を東流する阿武隈川は福島県と栃木県の境に位置する旭岳に端を発し、福島県内を北流して宮城県へと至る大河川であり、その全長は国内6位の239km、流域面積は5400km²を測る。当市は、この阿武隈川が太平洋に注ぐ河口部北岸に位置している。また、当市は古来より浜街道と、東街道が合する地点であるが、現在でも国道4号と同6号、JR東北本線と同常磐線の合流地点となっており、交通要衝の地として知られている。

市域を地質学的に大別すると、西側の山地と東側の広大な沖積地に分けられる。山地は南北に延びる高館丘陵（標高200～300m）・岩沼丘陵（標高10～100m）と、これから東へ舌状に張り出す標高10～30mほどの小規模な段丘面から成る。山地の東側に展開する広大な沖積地は名取平野と通称され、岩沼丘陵の東縁から太平洋までの間に7～8kmの幅をもって発達する。この名取平野は阿武隈川をはじめとし、五間堀川・志賀沢川などの中小河川の堆積作用によって形成され、その沿岸には自然堤防が頗著に発達している。



第1図 岩沼市の位置と地形分類

2. 周辺の遺跡と歴史的環境（第2図）

岩沼市では、現在66箇所の遺跡が確認されている。以下、市内の考古学的様相について概略を記す。

縄文時代の遺跡は、市域西側の丘陵部に広く点在し、特に志賀沢川流域の丘陵裾部にまとまった分布を確認できる。発掘調査によって得られた知見はまだ多くないが、鶴ヶ崎城跡【23】では鶴ヶ島式や梨木畠式に比定される早期後葉の土器群が発見されている（岩沼市教委2005）。

弥生時代の遺跡は9箇所で確認されているが、具体的な様相については明らかでない。遺跡の分布状況を見ると、その多くが縄文時代の立地を踏襲する形で丘陵部に展開する一方、かめ塚西遺跡【14】のように標高の低い平野部に立地する遺跡も見られるようになる。朝日古墳群【21】では、昭和55年の調査時に、中期後葉の時期を中心とした多量の土器片が出土し（岩沼市教委2007）、北原遺跡でも中期から後期に比定される土器片が出土している（宮城県教委1993）。

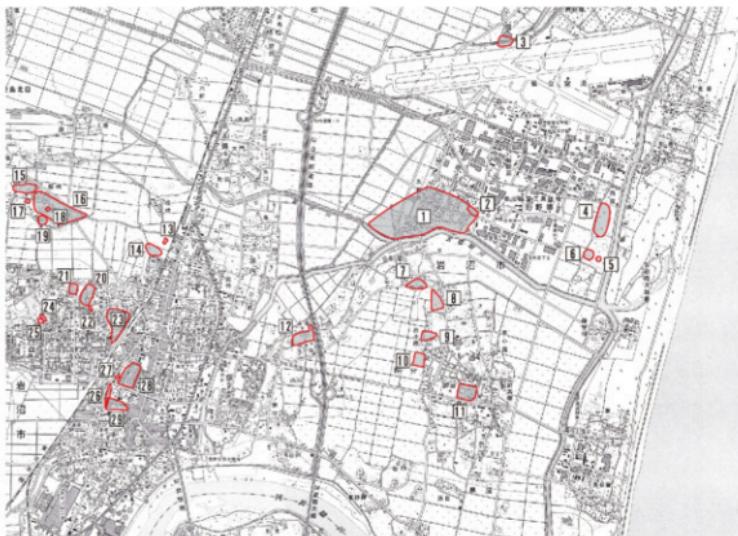
古墳時代の遺跡は31箇所で確認されており、北原遺跡では塩釜式期に比定される堅穴住居跡が36軒検出されている。このうち、10号住居跡からは39個の土玉が出土し、前代から続く稻作のほかに、生業として魚撈も行なっていたことが明らかとなった（宮城県教委1993）。

高塚古墳は、県指定史跡のかめ塚古墳【13】をはじめ、長岡地区の丘陵上に築かれた長塚古墳【17】、新明塚古墳【18】などが知られている。長塚古墳は、昭和26年（1951）に国学院大学の樋口清之教授らによって発掘調査が行われ、墳丘内部の墓室から人骨が発見されたという（岩沼市1984）。一方、横穴墓群は岩沼丘陵から東西に派生する低位丘陵斜面の泥岩層露頭面で多く造営され、現在までのところ9箇所で確認されている（消滅した横穴墓群を含む）。二木横穴墓群【26】では頭椎太刀の柄頭の一部が（鍛治・佐藤ほか1962）、長谷寺横穴墓群では全国的に稀少な子持ち平瓶が出土し（小野・志間1968）、さらに引込横穴墓群では轡の一部が出土（岩沼市教委2000）するなど、各遺跡で貴重な調査成果が得られている。

古代の様相については不明な点が多いが、『延喜式』に記載され、多賀城跡出土の過所本簡（多賀城跡調査研究所1985）でもその名が知られる「玉前刻」は、本市南部の玉崎地区に存在が比定されている。玉崎地区の東側に展開する原遺跡では古代の遺構・遺物が確認されており、駿家関連施設が営まれていた可能性がある。

中・近世の遺構と遺物は鶴ヶ崎城跡、下野郷館跡【1】、朝日古墳群、長徳寺前遺跡【19】、丸山遺跡【28】、竹駒神社境内遺跡【29】、中ノ原遺跡、西須賀原遺跡で確認されている。

鶴ヶ崎城跡の第1地点では、東北福祉大学によって平成24年まで12次に亘る調査が実施され、石列や溝跡、地鎮関連の遺構などが見つかっている（東北福祉大学2011）。また第4地点の調査では15世紀前半頃の青磁盤や常滑焼甕片などが出土し、さらに中世から近世の時期にかけて補・改修されたと推定される土累が確認された（岩沼市教委2005）。このほか、丸山遺跡では文献などの記録類では見られない中世末段階の区画溝を確認し、近世の岩沼要害を描いた各種古絵図にみられる「下中屋敷」を区画した溝跡なども検出している（岩沼市教委2010）。竹駒神社境内遺跡では、向唐門地点の調査で、伊達吉村によって行われた宝永7年（1710）の本殿改修に伴う大規模な整地層を確認した（岩沼市教委2009）。



第2図 岩沼市内遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	立地	種類	時代
1	下野瀬跡	下野瀬字前内・船舟	浜堤	城跡	古代・中世・近世
2	野外遺跡	下野瀬字野外	浜堤	散布地	古代
3	浜芦鬼谷跡	下野瀬字小谷地	台原堤防	散布地	古墳時代
4	真大瀬遺跡	下野瀬字真大瀬	浜堤	散布地	古墳・古代
5	仁古原古墳	下野瀬字仁入川	浜堤	円墳	古墳
6	仁古原西祖跡	下野瀬字仁入川	浜堤	散布地	古代・古代
7	前根遺跡	下野瀬字前根	浜堤	散布地	古代・近世
8	西土手遺跡	押分字西土手	浜堤	散布地	中世・近世
9	羽前遺跡	押分字羽前	浜堤	散布地	古代・近世
10	新筒下遺跡	押分字新筒下	浜堤	散布地	古代・近世
11	御田走遺跡	押分字御田走	浜堤	散布地	古代・近世
12	上中筋遺跡	下野瀬字上中筋	自然堤防	散布地	古代・中世・近世
13	分の深古墳	宇都塚	浜堤	前方後円墳	古墳時代
14	分の深西祖跡	宇都塚	浜堤	散布地	古生・古墳
15	豊塚北遺跡	豊塚字上豊塚	丘陵	散布地	古文・古墳・奈良・平安

No.	遺跡名	所在地	立地	種類	時代
16	上佐崎遺跡	長岡字上佐崎	丘陵	散布地	古文・古墳
17	長塚遺跡	長岡字白	丘陵斜面	円墳	古墳時代
18	新明治古墳	長岡字保原	丘陵斜面	新石器時代	古墳時代
19	新根寺前遺跡	長岡字保原	平地	積層	中世・近世
20	朝日遺跡	朝日一丁目	丘陵	散布地	古墳・古代
21	朝日古墳群	朝日二丁目	丘陵	散布地・円墳	古墳・中世
22	上ヶ崎側穴墓群	上ヶ崎二丁目	丘陵斜面	側穴墓群	古墳時代
23	前ヶ崎城跡	宝町一丁目	丘陵	城跡	國文字・中・中世・近世
24	白山古墳	字野田	丘陵	前方後円墳	古墳
25	白山側穴墓群	上ヶ崎四丁目河内	丘陵斜面	側穴墓群	古墳時代
26	二木側穴墓群	二木二丁目	自然斜面	側穴墓群	古墳時代
27	丸山側穴墓群	二木二丁目	自然斜面	側穴墓群	古墳時代
28	丸山遺跡	二木	自然斜面	集落跡	中世・近世
29	若狭神社始方遺跡	福岡町	自然斜面	社寺	近世

第三章 下野郷館跡第3地点

1. 調査要項

- 【遺跡名】 下野郷館跡 (Na15040)
- 【調査地点】 岩沼市下野郷字館内18
- 【調査期間】 平成24年4月27日～5月10日
- 【調査面積】 87m²
- 【調査原因】 個人住宅建築工事
- 【調査担当】 岩沼市教育委員会生涯学習課
- 【調査人員】 (発掘調査)
川又隆央 熊谷 篤 伊藤和雄 相原 正 菅原孝子
高橋とく子 早坂富美子 松木美由紀 条 和広
(資料整理)
川又隆央 熊谷 篤 伊藤和雄

2. 下野郷館跡第1・第3地点の成果概要（第3図）

今回の調査地点の周辺では、これまで第1地点、第2地点で発掘調査が行われている。以下にこの2地点の調査によって得られた成果の概略を記す。

【下野郷館跡第1地点】

第1地点は県道亘理塩釜線の改良工事に伴い、平成12～15年まで4次にわたる調査が行われている。検出遺構は掘立柱建物跡61棟、塀・柱列跡2条、井戸跡58基、溝跡53条、土坑31基などであり、主に五間堀川に近い調査区南半部に集中して分布していた。出土遺物の年代観から古代、中世、近世にかけて土地利用が断続的になされていたと考えられるが、主体となる時期は近世段階である。掘立柱建物跡の多くは重複関係にあるが、これは屋敷地内での建物建築範囲が概ね定まっていたことを示している。なお、主軸方位などから3～4期にわたる画期が想定されるが、柱穴内よりの出土遺物量は僅少であることから明確な変遷は提示できていない。井戸跡は掘立柱建物に近接して分布していることから、掘立柱建物跡と同様に屋敷地内での空間利用にある種の規定が存在していたと考えられている。大多数が素掘りであり、中でも上部が漏斗状を呈するものが最も多い。また木製の井戸枠を有する井戸跡も3基存在しているが、隅柱として杭を用いて横桟を渡し、外側に葦あるいは半載した竹を密にして並べるという構造を呈している。また井戸底面までの調査は湧水量が激しいことから崩落の危険性を鑑みて大半は未実施であったが、SE03の底面からは曲物を水溜として使用している事例が確認されている。溝跡は調査区全域で確認されているが、これらは規模や走方向から区画溝、取水・排水溝などの機能を考えられている。このうち区画溝では、SD10・407は建物の周囲にL字状に巡ることから屋敷地内の区画を目的



第3図 下野郷館跡第1～3地点合成図

に掘られた可能性が考えられる。これに対し調査区西側で直線的に南北方向に延びるSD60・506は、これより西側が湿地状の土層堆積であり建物等が存在しないこと、底面が緩やかに五間堀川へ向かって傾斜していることから大局的にはこの地区的居住区域の境界を示し、併せて排水を目的に掘られたものと考えられている。土坑も調査区のほぼ全域で確認されているが、特にSK401は、内部からは白石市周辺で生産された中世陶器甕片のみが出土していることから中世段階の遺構である可能性が高く、また規模も長軸・短軸とも他の土坑と較べて大きいことから倉庫的な機能を有していた可能性も考慮できる。

【下野郷館跡第2地点】

第2地点は東日本大震災により被災した個人住宅建築工事に伴い、平成23年に調査が行われている。検出遺構は井戸跡2基、溝跡2条、土坑9基、焼土・炭化物を上面に有する性格不明土坑4基などであり、出土遺物の年代観から大半が近世以降の遺構であると考えられている。不明土坑は、いずれも25～35cmほどの掘り込みを有する点で共通しているが、堆積土中には粒状滓をはじめとする金属遺物が認められないことから、鍛冶関連遺構の可能性は低いものと考えられる。なお、同様の遺構は第1地点の調査では未検出であり、これらの性格については遺跡地内での分布も含め今後の検討課題である。

3. 調査に至る経緯（第4図）

平成23年12月18日に下野郷字館内地内において被災家屋の解体及び新築工事についての照会があり、岩沼市教育委員会では対象地が下野郷館跡の範囲に含まれている旨を回答した。その



第4図 調査地点位置図と調査区配置図

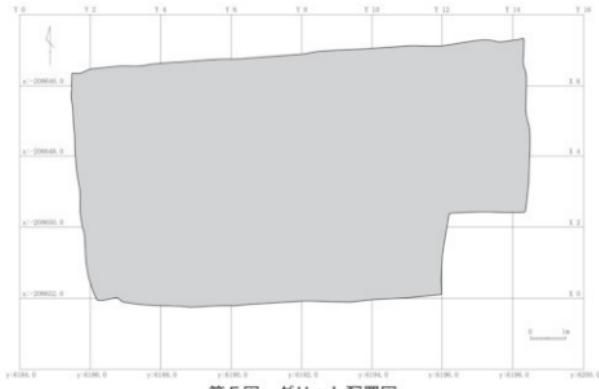
後、地権者より平成23年12月28日付けで「個人住宅新築工事計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出され、ついで平成24年1月17日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届が提出された。岩沼市教育委員会では、宮城県教育庁文化財保護課の指示を受けて被災家屋の撤去時に工事立会を実施する予定であったが、担当業者から事前の連絡が無く、4月下旬に市内を巡回していた際、当該家屋が既に撤去された事实を知った。4月27日に遺構・遺物の有無等を把握することを目的とした確認調査を実施したが、重機を使用した掘削時より近世遺物が出土し、また現地表下90cmほどで遺構の存在が確認できたことから、記録保存を目的とした本調査へ切り替える運びとなった。

4. 調査経過と方法（第5図）

平成24年4月27日から重機を使用した表土掘削を開始した。設定した調査区の面積は87m²である。その後、重機で下がきれなかった部分を人力で掘削し、遺構精査作業を開始した。遺構確認状況の全景撮影を5月2日に行った後、遺構の掘り下げ、土層図及び平面図の作成を随時実施し、5月9日に完掘状況の全景写真を撮影した。翌日の5月10日には埋戻しと機材搬出を行い、発掘作業的一切を終了した。

国家座標及び海拔の移動は本格調査へ切り替えた後の5月2日に行った。本調査で使用した測量軸の設定に関しては、国家座標を使用した。使用した測量原点は岩沼市公共基準点3-019（X；-208945.178・Y；6654.229）と同2-011である。調査敷地内のX；-208652.000・Y；6184.000地点にYOYO杭を設定し、2mごとにグリッドライン名を附した。また各グリッドの名称は北東隅の交点を採用した。

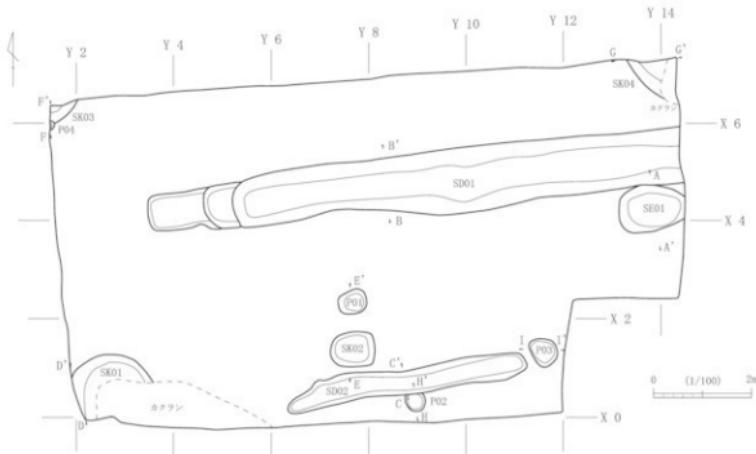
出土品の整理作業・報告書の作成は、暫時の中断を挟みながら2012年12月1日から2013年2月28日にかけて、岩沼市文化財整理室内で行なつた。



第5図 グリット配置図

5. 基本土層

本地点の上層は近現代の宅地化に伴う盛土が行われているが、その直下では近世の旧表土が残るなど、土層の遺存状況は概ね良好である。SD01の北側壁面で行った土層観察では、黄褐色粘質シルトを主体とする層が西から東へ層厚を増していく様子を確認できた。また、この粘質シルト直下の黒色砂層も北から南へ若干傾斜していくことから、本地点の旧地形は北西方向から南東方向にかけて緩やかに傾斜する堆積状況であることが判明した。なお、遺構精査は現地表から深さ約90cmの褐色粘質シルト上面で行っている。



第6図 遺構全体図

6. 発見された遺構と遺物

本調査では井戸跡1基、溝跡2条、土坑4基、ピット4口を検出した。遺構の分布は調査区が狭小のためほぼ全域で見られるが、調査区を東西方向に延びるSD01溝跡よりも南側に僅かながら集中している。

以下、検出した遺構及び遺物について記述する。遺構の方位は長軸方向を主軸方位とし、北からの振れをN-○°-WまたはN-○°-Eに統一して表記する。

なお、個々の遺構の年代観については遺構出土の遺物が僅少であることからここでは明示できないが、現時点では出土遺物の状況、第1地点及び第2地点での知見を加味し、概ね近世段階の遺構として認識している。

a.井戸跡

SE01井戸跡（第7図）

調査区東側中央部X6Y14グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は無く、東側の立ち上がりが調査区外へ展開する。平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸135cm、短軸101cm、確認面よりの深さは72cm、主軸方位はN-82°-Eを測る。断面形状はU字形であり、一部地盤が崩落している。堆積土は4層に細分され、全て人為的埋土である。

井戸枠などの構造物は確認できず、遺物も出土していない。



第7図 井戸跡・溝跡

b.溝跡

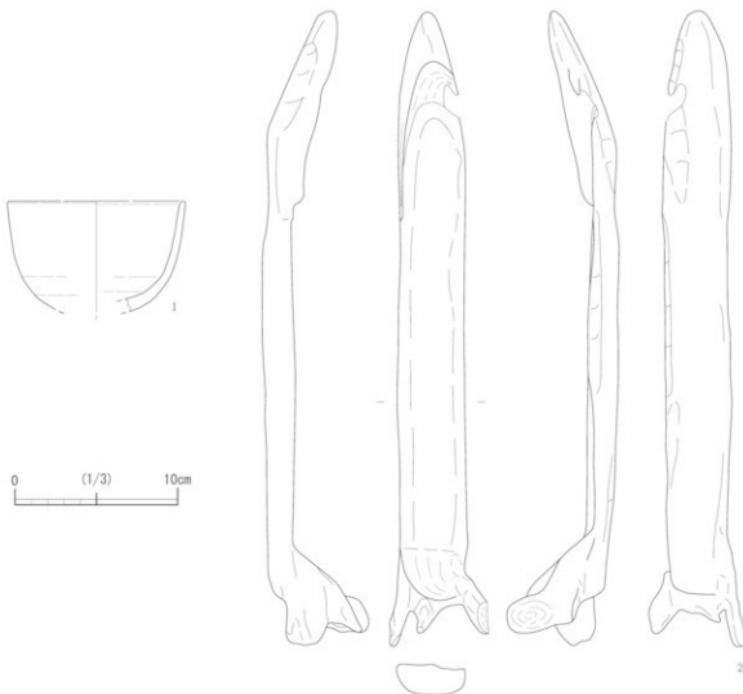
SD01溝跡（第7・8図）

調査区のほぼ中央部に位置する東西溝跡である。他の遺構との重複関係は無く、東側が調査区外へ展開するため全長は不明であるが、総長約11mを検出している。西側は調査区西壁から東へ1.9m付近の位置で途切れ、立ち上がり部分では2段の段差が構築されている。断面形状は箱状を呈し、規模は上幅0.9～1.3m、下幅0.5～1.0m、確認面よりの深さは80cmを測る。主軸方位はN-82°-Wを測り、堆積土は7層に細分され、6層と7層が自然堆積土、それ以外は全て人為的埋土である。本址は、検出された位置が第1地点B区で確認されたSD212の延長線上に相当し、上幅や下幅の規模もこれ近似することから、両者で一連を成す近世段階の区画溝である可能性が考慮される。

遺物は、覆土中から陶器、土師質土器、木製品が出土し、これらのうち瀬戸美濃産陶器碗1点、

舟形状木製品1点を図示した（第8図1、2）。舟形状木製品は、先端部分や表面を大きく削り出して成形され、側面や裏面などにも調整痕が見受けられる。末端部分は不均整な形だが、少なからず加工の痕跡が認められる。

仙台城跡では、池跡から祭祀で使用された可能性のある近世段階の舟形木製品が出土しており（仙台市教委2009）、本遺物も完全な舟形を呈するものではないが、用途や性格については祭祀に関わる可能性を考慮する必要がある。



SD01出土遺物観察表

No	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備考	写真 番号	登録 番号
1	施釉陶器	碗	瀬戸美濃	17世紀前半？	(10.8)	—	(6.8)	内外面灰釉 接触痕	1	No.10
2	木製品	舟形状木製品			39.2	6.1	6.9	先端と側面に加工痕 一部欠損	2	No.11

第8図 SD01出土遺物

SD02溝跡（第7図）

調査区南側に位置する東西溝跡である。P02と重複し、これより新しい。規模は長軸5m、短軸55cm、確認面よりの深さは9cm、主軸方位はN-78°-Wを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、堆積土は2層に細分され、いずれも人為的埋土である。

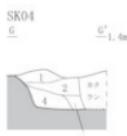
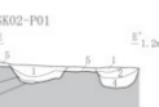
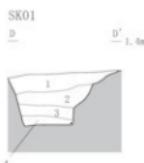
遺物は出土していない。

c.土坑

SK01土坑（第9図）

調査区南西隅X8Y2グリッドに位置する。平面形状は円形を呈すると思われるが、大部分が攪乱によって失われている。西側と南側の立ち上がりは調査区外へ展開するため、主軸方位や詳細な規模は不明であるが、確認面からの深さは64cmである。断面形は下部が箱状を呈し、上部が漏斗状に開く。堆積土は4層に細分され、1～3層が人為的埋土、4層が自然堆積土である。

遺物は出土していない。



SK01土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(2, 0103/21) 和賀シルト	しまりやや弱い。マンガン鉄少産。炭化物微量含む。
2	黒褐色	(2, 0103/21) 和土	弱地強い。マンガン鉄や多。黄褐色土ブロック少量含む。
3	黒褐色	(2, 0103/21) 和土	マンガン鉄や多量含む。
4	黒褐色	(2, 0103/21) 砂	松根φ0.3～1.17mの軽石の砂。マンガン鉄を少量含む。

SK02-P01土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	黒褐色	(7, 0103/21) シルト	しまりやや弱い。褐色粘土少量含む。
2	暗褐色	(7, 0103/21) 和賀シルト	しまりやや強い。褐色粘土多量含む。
3	黒褐色	(7, 0103/21) 和賀シルト	しまりやや弱い。褐色粘土多量含む。
4	暗褐色	(7, 0103/21) 和賀シルト	しまりやや弱い。褐色粘土少量含む。
5	暗褐色	(7, 0103/21) 和賀シルト	しまりやや強い。

SK03-P04土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	暗褐色	(10/03/21) シルト	褐色土、炭化物微量に含む。しまりやや弱い。
2	暗褐色	(2, 10/03/21) 和賀シルト	マンガン鉄をや多。炭化物微量に含む。
3	暗褐色	(10/03/21) 和賀シルト	炭化物微量に含む。
4	灰褐色	(10/03/21) 和賀シルト	マンガン鉄を多量。炭化物を微量に含む。無力土。

SK04土層注記

層No.	土色	土質	備考
1	灰褐色	(10/03/21) シルト	しまりやや弱い。褐色ブロックを多く含む。
2	褐色	(10/03/21) シルト	しまりやや弱い。褐色ブロックを多く含む。
3	灰褐色	(10/03/21) 和賀シルト	マンガン鉄。炭化物土を多量に含む。しまり弱い。
4	褐色	(10/03/21) 和賀シルト	マンガン鉄を少量含む。しまり弱い。



第9図 土坑・ピット

SK02土坑（第9図）

調査区南側中央部X2Y2グリッドに位置する。他の遺構との重複関係は無い。平面形状は梢円形を呈し、規模は長軸90cm、短軸72cm、確認面よりの深さは23cm、主軸方位はN-80°-Wを測る。断面形状は逆台形を呈し、堆積土は3層に細分され、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

SK03土坑（第9図）

調査区北西隅X8Y2グリッドに位置する。P04と重複関係にあり、これより古い。北側と西側の立ち上がりは調査区外へ展開するため、主軸方位や詳細な規模は不明であるが、確認面からの深さは62cmである。堆積土は3層に細分され、全て人為的埋土である。

遺物は、覆土中から2.5cm程度の鉄滓が出土している。

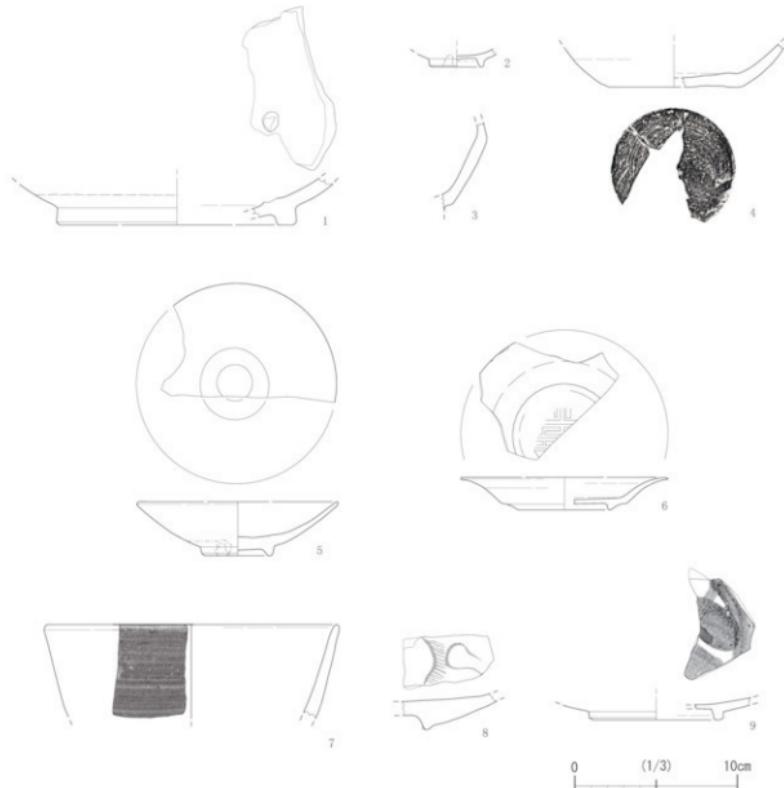
SK04土坑（第9図）

調査区北東隅X8Y14グリッドに位置する。一部が擾乱によって失われ、さらに北側と東側の立ち上がりは調査区外へ展開するため、主軸方位や詳細な規模は不明であるが、確認面からの深さは45cmである。断面形状は皿状を呈するものと思われる。堆積土は4層に細分され、全て人為的埋土である。

遺物は出土していない。

d.遺構外出土遺物（第10図）

本調査における遺構外出土遺物は、総計95点（内訳は陶磁器77点、土師質土器7点、瓦質土器2点、瓦2点、木製品3点、金属製品4点）を数える。大半は近世・近代遺物の細片であったが、大型破片など図化可能なものを第10図に図示した。



遺構外出土遺物觀察表

No.	種別	器種	生産地	年代	口径・長 (cm)	底径・幅 (cm)	高さ・厚 (cm)	備 考	写真 番号	登録 番号
1	施釉陶器	皿	唐津	17世紀前半	—	(14.4)	(2.9)	内外面鉄輪 剥出高台 粉土溶着痕	5	No.2
2	施釉陶器	皿	大堀相馬	19世紀?	—	3.6	(1.1)	内外面灰釉 剥出高台 滂避ぎ痕	10	No.3
3	施釉陶器	天目碗	瓶戸美濃	17世紀代	—	—	(5.5)	内外面天目釉	8	No.9
4	土器	吉良焼	在潮	17世紀末～18世紀?	—	8.0	(1.6)	外底面回転糸切未調整・一部煤付着	11	No.7
5	施釉陶器	皿	肥前	17世紀後半～18世紀後半	(12.9)	4.4	3.3	内外面青緑釉 剥出高台 見込蛇/日輪剥ぎ	4	No.8
6	白磁	皿	瓶戸美濃	19世紀中頃～後半	(12.8)	5.7	2.0	削出高台 見込寿文(一部磨滅)	3	No.1
7	施釉陶器	鉢	唐津	18～19世紀前半	(17.9)	—	(5.8)	内外面灰釉 外面刷毛目白化粧装飾(模印)	6	No.4
8	青磁	皿	肥前	17世紀代	—	—	(2.2)	内外面青磁釉 高台に砂貝 叠付に鉄錆微痕	9	No.5
9	施釉陶器	皿	大堀相馬	18世紀末～19世紀	—	8.2	(1.4)	内外面灰釉 内面鉄輪(文様不明)	7	No.6

第10図 遺構外出土遺物

7.まとめ

- ・下野郷館跡は、岩沼市下野郷字館内に所在し、地質学的には五間堀川左岸の自然堤防上に立地している。
- ・周辺では平成12～15年にかけて県道改良工事に伴う発掘調査が実施され、中世～近世までの遺構・遺物が確認されている（第1地点）。
- ・今回の調査区は第1地点から約100m東に位置し、近世を中心とした遺物が確認されている。
- ・検出遺構は井戸跡1基、溝跡2条、土坑4基、ビット4口であり、このうちSD01は第1地点B区で確認されたSD212の延長線上に相当することから、近世段階の区画溝である可能性が考慮される。
- ・SD01は調査区内で西側が途切れ、立ち上がり部分では2段の段差が築かれている。第1地点のSD212と一体を成す遺構として捉えた場合、本址の立ち上がり部分から西側は区画内外への出入口として機能した可能性がある。ただし、調査区が狭小で対面の溝跡を検出していないことなどから、現時点での断定はできない。
- ・SD01の覆土中から舟形状を呈する木製品が出土した。用途や性格については、類例の増加を待って今後の検討課題としたい。
- ・このほか、遺構に伴う遺物は極めて少ないが、遺構外出土陶磁器の年代観から、概ね江戸時代を通じて機能した遺跡と推量される。

引用・参考文献

- 岩沼市 1984 『岩沼市史』 岩沼市史編纂委員会
- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
- 岩沼市教育委員会 2000 『引込横穴墓群発掘調査報告書』 岩沼市文化財調査報告書第1集
- 岩沼市教育委員会 2004 『下野郷館跡』 岩沼市文化財調査報告書第2集
- 岩沼市教育委員会 2005 『鶴ヶ崎城跡・第4地点』 岩沼市文化財調査報告書第6集
- 岩沼市教育委員会 2007 『朝日古墳群』 岩沼市文化財調査報告書第7集
- 岩沼市教育委員会 2009 『竹駒神社境内遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第8集
- 岩沼市教育委員会 2010 『丸山遺跡』 岩沼市文化財調査報告書第9集
- 小野力・志間泰治 1968 「装飾土器を出土した宮城県岩沼町所在の長谷寺横穴古墳調査報告」『日本考古学協会第34回総会研究発表要旨』
- 鍛冶一郎・佐藤宏一他 1962 『宮城県岩沼町丸山横穴古墳群』『東北考古学 第3号』
- 仙台市教育委員会 2009 『仙台城跡』 仙台市文化財調査報告書第342集
- 東北福祉大学吉井ゼミナール 2011 『鶴ヶ崎城跡（岩沼要害）・第10次発掘調査報告書』 東北福祉大学
- 宮城県教育委員会 1993 『北原遺跡』 宮城県文化財調査報告書第159集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1985 『第47次調査』『多賀城跡』 宮城県多賀城跡調査研究所年報1984

掘削状況



遺構検出状況（西から）



SE01井戸跡（西から）



写真図版 1



SD01溝跡（東から）



SD01溝跡完掘状況（北東から）



舟形状木製品出土状況（南東から）

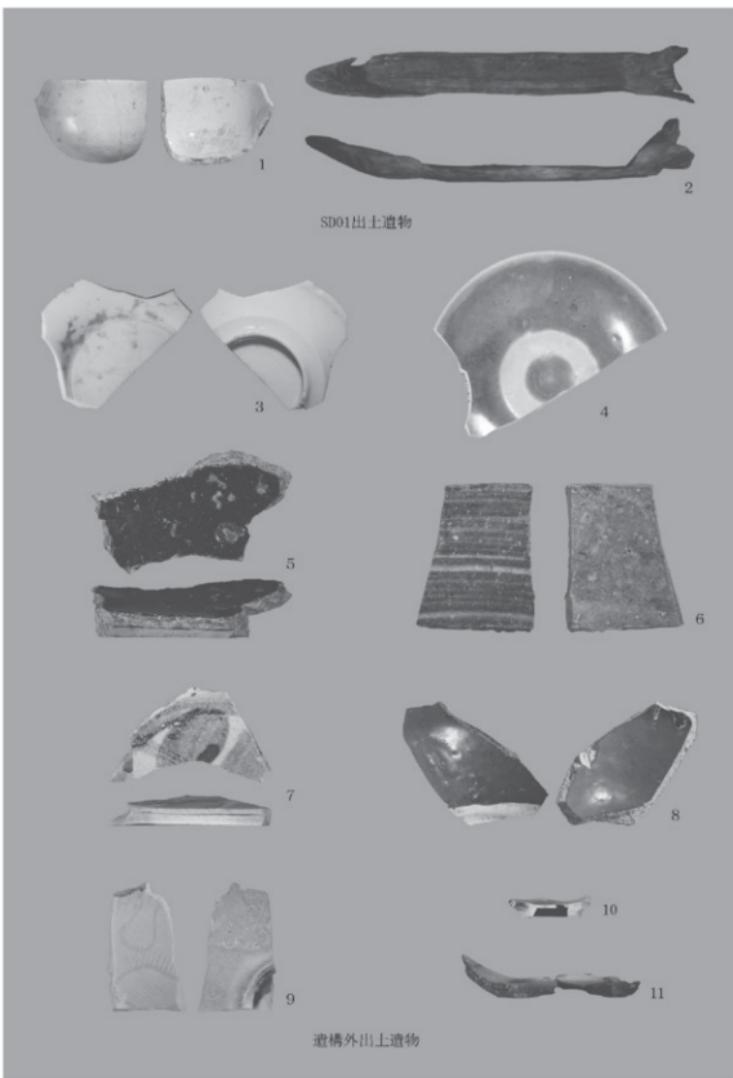


調査区全景（南西から）



遺構完掘状況（西から）

写真図版 2



写真図版3

第IV章 新筒下遺跡隣接地試掘調査

1. 調査要項

- 【遺跡名】 新筒下遺跡（隣接地）
【調査地点】 岩沼市押分字新筒下 地内
【調査期間】 平成24年5月21日
～31日
【開発面積】 27,000m²
【調査面積】 1,100m²
【調査原因】 玉浦西地区防災集団移転促進事業
【調査担当】 岩沼市教育委員会生涯学習課



第1図 防災集団移転事業地と周辺の遺跡

2. 調査に至る経緯

東日本大震災によって岩沼市東部地区では相の釜、藤曾根、二野倉、長谷釜、蒲崎、新浜の6地区が防災集団移転促進事業に該当している。市では平成23年9月に策定した「岩沼市震災復興マスタープラン」をもとに6地区の集団移転が可能な土地を検討し、押分字新筒下地内を最終候補に挙げて地権者との協議を行った。

平成24年4月に地権者との合意形成が概ね成立する見通しとなったことを受けて、市関係部署（復興推進課、復興整備課）から市教育委員会へ、対象地内に埋蔵文化財存在の有無の問い合わせがあった。教育委員会生涯学習課では他事業に伴って対象地周辺の現地踏査を行った結果、北側に隣接して遺跡の存在が推定（のちに「新筒下遺跡」として遺跡台帳へ登録）されたことから、事業着手以前に対象地内で埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施する必要性がある旨を回答した。その後、復興整備課では地権者から試掘調査についての承諾を得るなどの調査環境が整ったことから、平成24年5月21日から試掘調査を開始した。



調査地点全景（東から）

3. 遺跡の立地と環境

岩沼市東部地区は、約4500年前の縄文時代に起こった海退後に阿武隈川などの河川によって運ばれた堆積物、及び海退時に形成された浜堤によって構成されている。このうち浜堤は現在の海岸線を含めると4列の存在が現時点まで確認されており、市街地（中央通りに相当）のものを第1列、早股一押分一下野郷一仙台空港ラインが第2列、貞山堀付近に存在するものを第3列と呼称している。この浜堤間は後背湿地となっており、古くから水田經營が行われていたと考えられ

る。調査地点はこのうちの第2列浜堤から西側の後背湿地を臨む地域に相当すると考えられる。この浜堤は約2000年前の弥生時代中期にはすでに形成されていたと考えられており、これまでも孫兵衛谷地遺跡では古墳時代前期を初現とする遺跡の存在が明らかとなっている。また下野郷地区でも船外遺跡、下野郷館跡で奈良・平安時代の遺物が出土しており、当時は微高地状となっていたこの浜堤では人々が集住して生活を営んでいた可能性が極めて高い。

4. 調査成果概要

調査地点は開発対象地内のうち、浜堤土壤が遺存していると考えられる東側を選定した。設定したトレンチは9本であり、北側からA～Iとアルファベットで名称を付している。各トレンチの規模は事前に地権者から承諾を得た田面の大きさを考慮して、それぞれ設定した。

調査では重機を使用して表土である田面構成土を除去したのち、人力で浜堤形成土壤の上面を精査して遺構・遺物の有無を把握することにしていたが、湧水が著しいことからただちに遺構面精査へは着手できず、トレンチの各辺に排水溝を掘削したのちに遺構精査を実施している。以下に各トレンチの概要を記す。



第2図 試掘トレンチ配置図 (S=1/2000)

Aトレンチ

Aトレンチは長さ60m、幅4mの面積240m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より東側では浜堤基盤層である褐色砂層を、中央付近から

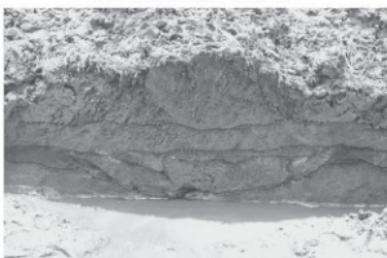
西にかけては旧表土と考えられるオリーブ黒色砂質シルト層を検出している。調査区壁際に設定した排水溝壁面での土層観察では、褐色砂、オリーブ黒色砂質シルトとともに西側に向かって傾斜しているが、西側では再び褐色砂が緩やかに立ち上がっていることから本来は窪地状の地形であったと推定される。遺構は東側の褐色砂検出範囲において、南北方向に軸線を有する溝跡3条が確認された。このうちSD01は田面構成土直下からの掘り込みであり、規模は幅70cm、深さ25cmを測り、黒褐色粘質シルトを覆土としている。なお、遺構も含めトレンチ内からの出土遺物は無い。

Bトレンチ

Bトレンチは長さ30m、幅4mの面積120m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より東側から中央付近では浜堤基盤層である褐色砂層を、西側にかけては旧表土と考えられるオリーブ黒色砂質シルト層を検出している。調査区壁際に設定した排水溝壁面での土層観察では、褐色砂、オリーブ黒色砂質シルトとともに西側に向かって傾斜していることが確認されている。遺構は東側の褐色砂検出範囲において、性格不明遺構が東西方向に列状に3基確認されているが、これらは1辺が約4mほどの方形を呈するものと思われる。排水溝壁面での土層観察ではいずれも黒褐色粘質シルトを覆土としているか底面は掻拌されている状況が認められ、立ち上がりも不明瞭となっていることから、現時点では耕地整理以前の小区画水田痕跡と考えている。なお、この性格不明遺構内からは近世陶器片が出土している。



Aトレンチ全景（東から）



AトレンチSD01断面（北から）



Bトレンチ全景（西から）



BトレンチSX01～03（南西から）

Cトレンチ

Cトレンチは長さ50m、幅4mの面積200m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より東側から中央付近では浜堤基盤層である褐色砂層を、西側では旧表土と考えられるオリーブ黒色砂質シルト層を検出しているが、中央部ではグライ化した土壌が検出されている。調査区壁際に設定した排水溝壁面での土層観察では、このグライ層は緩やかな傾斜を示していることから、砂丘間の窪地が後背湿地状となっていたことが推定される。遺構は中央付近で南北方向に軸線を有する溝跡2条、東側で土坑2基が確認された。このうち溝跡はいずれも同様の主軸方位で田面構成土を含まず、規模は幅30～40cm、深さ15cmを測り、黒褐色粘質シルトを覆土としている。後述するDトレンチ検出の小溝状遺構群と主軸方位、規模ともに共通点が認められることから、耕地整理以前に行われていた畑作の天地返しなどの痕跡と考えられる。土坑は田面構成土を覆土中に含む。なお、遺構も含めトレンチ内からの出土遺物は無い。



Cトレンチ全景（西から）

Dトレンチ

Dトレンチは長さ30m、幅4mの面積120m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より東側から中央付近では浜堤基盤層である褐色砂層を、中央付近より西側では旧表土と考えられるオリーブ黒色砂質シルト層を検出している。調査区壁際に設定した排水溝壁面での土層観察では、褐色砂、オリーブ黒色砂質シルトとともに西側に向かって傾斜していることが確認されている。遺構は東側で南北方向に軸線を有する小溝状遺構6条が確認された。小溝状遺構はCトレンチ検出遺構と同様にいずれも主軸方位が一致し田面構成土を含まず、規模は幅40～60cm、深さ15cmを測り、黒褐色粘質シルトを覆土としており耕地整理以前に行われていた畑作の天地返しなどの痕跡と考えられる。なお、遺構も含めトレンチ内からの出土遺物は無い。



Dトレンチ全景（西から）



Dトレンチ小溝状遺構群（南西から）

Eトレーニチ

Eトレーニチは長さ25m、幅4mの面積100m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より調査区全面で黒褐色砂質シルト層を検出している。調査区壁際に設定した排水溝壁面での土層観察では、他のトレーニチで共通して確認されている浜堤形成土である褐色砂、旧表土であるオリーブ黒色砂質シルトとも確認されていないことから、砂丘間の窪地であった可能性が推量できる。遺構・遺物ともこのトレーニチでは確認されていない。



Eトレーニチ全景（西から）

Fトレーニチ

Fトレーニチは長さ25m、幅4mの面積100m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より調査区全面で浜堤基盤層である褐色砂層を検出している。調査区壁際に設定した排水溝壁面での土層観察では、西側部分で旧表土であるオリーブ黒色砂質シルトが薄く堆積していることが確認されていることから、極めて緩やかに西へ傾斜しているものと考えられる。遺構は東側で南北方向に軸線を有する溝跡2条が確認された。いずれも暗褐色粘質シルトを覆土としており、田面構成土を含まず、規模はSD01が幅100cm、深さ20cmを測り、SD02が幅50cm、深さ10cmを測る。なお、遺構も含めトレーニチ内からの出土遺物は無い。



Fトレーニチ全景（西から）



FトレーニチSD01（南から）

Gトレーニチ

Gトレーニチは長さ25m、幅4mの面積100m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より東側から中央付近では浜堤基盤層であ



Gトレーニチ全景（西から）

る褐色砂層を、中央付近より西側では旧表土と考えられるオリーブ黒色砂質シルト層を検出している。調査区壁際に設定した排水溝壁面での土層観察では、褐色砂、オリーブ黒色砂質シルトとともに西側に向かって傾斜していることが確認され、西側部分では旧表土であるオリーブ黒色砂質シルトが厚く堆積していることが確認されていることから、緩やかに西へ傾斜しているものと考えられる。遺構は東側で暗褐色粘質シルトを覆土とするピット1口を確認した。なお、遺構も含めトレンチ内からの出土遺物は無い。

Hトレンチ

Hトレンチは長さ25m、幅4mの面積100m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より中央付近から西側では浜堤基盤層である褐色砂層を検出しているが、中央付近より東側ではEトレンチ全面で検出されたと近似した黒褐色砂質シルト層を検出している。調査区壁際に設定した排水溝壁面での土層観察では、東側の黒褐色砂質シルト層はやや急激に傾斜しているが、自然堆積層であることからEトレンチと同様に砂丘間窪地の可能性が考慮できる。遺構は中央付近で黒褐色砂質シルトを覆土とする土坑1基、西側で幅50cm、深さ15cmの南北方向に軸線を有する溝跡1条を確認した。なお、遺構も含めトレンチ内からの出土遺物は無い。

Iトレンチ

Iトレンチは長さ10m、幅2mの面積20m²と設定して調査を行った。表土は20cmの厚みを持つ田面構成土であり、これを除いた下より調査区全面で浜堤基盤層である褐色砂層



Hトレンチ全景（西から）



HトレンチSD01（南から）



Iトレンチ全景（東から）



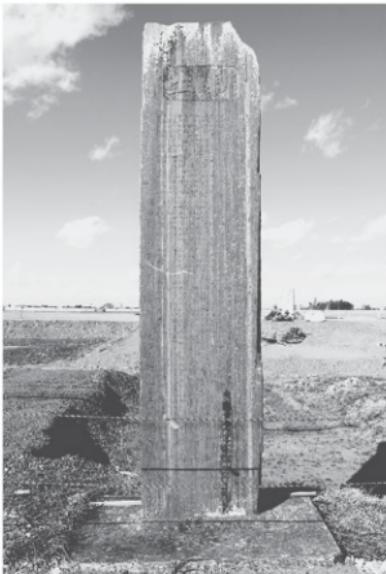
排水作業風景（西から）

を検出している。遺構・遺物ともこのトレンチでは確認されていない。

5.まとめ

Eトレンチを除く調査区の大部分では、田面直下より浜堤形成土壤である褐色砂が東側で、旧表土の可能性があるオリーブ黒色砂質シルト層が西側で確認されている。調査地点では昭和36年に成立した農業機械化法を受けて、昭和37年に「岩沼町玉浦北部土地改良区」が組織され、昭和38年に圃場整備を着手、完工したことが調査地点の傍らに立つ「耕土」銘石碑に記されている。試掘調査した全域において旧表土の残存が極めて薄い堆積であった主たる要因としては、この耕地整理による旧地形改変と考えられる。

今回の調査で確認できた遺構は、溝跡と土坑、耕地整理以前の小区画水田痕跡と考えられる遺構と不明瞭な落込みのみであり、堅穴住居跡や屋敷を構成する柱穴跡は一切確認されていない。上面の削平によって失われた可能性も無論考慮できるが、生活の場に必要な飲料水を獲得するための井戸なども未確認であることを鑑みれば、今回の事業対象地は永く生産域として利用されていたものと考えられる。



防災集団移転事業地の傍らに立つ「耕土」碑

引用・参考文献

- 岩沼市 1984 『岩沼市史』 岩沼市市史編纂委員会
- 岩沼市 1992 『岩沼市土地分類調査（細部調査）報告書・現況調査編』
- 岩沼市 2012 『岩沼市震災復興計画 マスタープラン』

第V章 鶴ヶ崎城跡（第5地点）確認調査報告

1. 調査要項

- 【遺跡名】 鶴ヶ崎城跡(隣接地)
【調査地点】 岩沼市栄町一丁目 地内
【調査期間】 平成24年9月5日
【対象面積】 98.50m² (建築面積)
【調査面積】 8 m²
【調査原因】 東日本大震災に伴う個人住宅
建築工事
【調査担当】 岩沼市教育委員会生涯学習課



第1図 調査地点位置図

2. 調査に至る経緯

平成24年7月に下野郷字館内地内において被災家屋の解体及び新築工事についての照会があり、岩沼市教育委員会では対象地が鶴ヶ崎城跡の隣接範囲に含まれている旨を回答した。その後地権者より平成24年8月10日付けで「個人住宅新築工事計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が提出され、ついで9月1日付けで文化財保護法第93条に基づく発掘届が提出された。岩沼市教育委員会では宮城県教育委員会文化財保護課の指示を受けて被災家屋の撤去時に工事立会を実施し、撤去完了後の9月4日に遺構・遺物の有無等を把握すること目的とした確認調査を実施した。

3. 遺跡の立地と環境

鶴ヶ崎城跡は、JR東日本岩沼駅北側の丘陵及び丘陵裾の低地にかけて展開する。遺跡地内ではこれまで宅地造成工事や共同住宅建築等に伴う発掘調査、学術目的とした発掘調査のほか、個人住宅建築等に伴う確認調査、工事立会も8箇所で実施され、縄文時代早期末葉の埋没谷、中世に構築されたと考えられる土壘と舶載陶磁器や国内産陶器、近世の区画溝や屋敷地内の施設と考えられる掘立柱建物跡や区画溝などの遺構のほか、17～19世紀にかけての遺物が出土している。

今回の対象地は埋蔵文化財保蔵地の範囲外であるが、地形的に見ても明瞭な区分は見られず、江戸時代に描かれた古絵図でも「下中屋敷」として描かれてい



第2図 調査区配置図

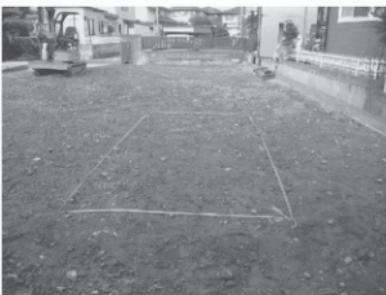
ることから、中世～近世の遺跡が含まれている可能性を考慮して確認調査を実施している。

4. 調査成果概要

調査はまず建物建設範囲内に $4 \times 2\text{ m}$ のトレンチを設定したのち、重機を用いて表土掘削を行った。表土から20cmまでは既存住宅建設に伴う現代盛土であり、その下位では灰黄褐色シルトと黒褐色シルトの2時期の耕作土が検出された。この耕作土中からは肥前産と考えられる染付皿、大堀相馬焼碗が少量出土しており、近代以降の遺物を含んでいないことから近世後期頃の耕作土と考えている。この耕作土の下位である地表面下47cmでは泥岩粒を多量に含む整地面の存在が確認されたことから、この面上で人力による遺構精査を行った。しかしながらここでは柱痕跡を伴わない、深さ5cmほどの小ビット1口が検出されたのみであり、また遺物の出土も無かつた。その後、サブトレンチを設定して整地層より下位での遺構・遺物の検出に努めたが、整地層以下では遺物の出土も無く、マンガンを少量含む黒褐色粘質シルトが1m以上の厚みをもって堆積していることを確認するに留まっている。

5.まとめ

調査範囲内では近世の所産と考えられる2時期の耕作土を確認した。その下位では泥岩粒を多量に含む整地層の存在を確認したが、その層厚は僅か3cmほどであり、また検出遺構も小ビット1口のみであったことから、本地点は屋敷地内でもあまり利用頻度が高くなかつた空間であった可能性が考慮できる。しかしながら、他所から発生した土砂を用いて整地を行うには多大な人力等を要したことから容易に想像できることから、この整地面造成の時期としては岩沼城(岩沼要害)機能時と捉えて支障が無いと考えている。この整地面造成の年代をさらに絞り込むことは、出土遺物が乏しいために現時点では不可能であるが、今後周辺の調査を実施する際に念頭に置く必要性があるものと考えている。



調査区配置状況（東から）



整地面検出状況（東から）

報告書抄録

ふりがな	ひがしにほんだいしんさいふっこうかんれんmaiぞうぶんかざいちょうsaほうこくしょ							
書名	東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書							
副書名	下野郷館跡第3地点ほか							
巻次	II							
シリーズ名	岩沼市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
編集者名	川又隆央・熊谷篤							
編集機関	岩沼市教育委員会							
所在地	〒989-2480 宮城県岩沼市桜1丁目6-20 TEL(0223)-22-1111							
発行年月日	西暦 2013年3月31日							
所取遺跡	所在地	市町村コード 市町村	北緯 度	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
下野郷館跡	岩沼市 下野郷 字館内	042111	15040	38° 07' 11"	140° 54' 12"	20120427 ~ 20120510	87 m ²	東日本大震 災に伴う個 人住宅新築 工事
新簡下遺跡	岩沼市 押分 字新簡下	042111	15057	38° 06' 18"	140° 54' 18"	20120521 ~ 20120531	1,100 m ²	玉浦西地区 防災集団移 転促進事業
鶴ヶ崎城跡	岩沼市 栄町 1丁目	042111	15023	38° 06' 45"	140° 52' 01"	20120905	8 m ²	東日本大震 災に伴う個 人住宅新築 工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
下野郷館跡 (第3地点)	星敷跡	近世	井戸跡 溝跡 土坑 ピット	近世陶磁器 土器 木製品	近世の区画 溝と考えら れる SD01 覆土中から 舟形状木製 品が出土。			
新簡下遺跡 (隣接地)	散布地	古代・近世	溝跡 土坑 小溝状遺構 ピット	近世陶器	第2列浜堤 を形成する 土壌を確認 した。			
鶴ヶ崎城跡 (第5地点)	星敷跡	近世	ピット	近世陶磁器	近世の整地 層を確認し た。			

岩沼市文化財調査報告書第13集
東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査報告書II
一下野郷館跡第3地点ほか一
平成25年3月
発行 岩沼市教育委員会
岩沼市桜1丁目6番20号
生涯学習課 TEL0223(23)1111 内線573
印刷 株式会社 国井印刷
岩沼市藤浪1丁目4-35
TEL0223(22)2221